

「灰かぶり」



灰かぶりが舞踏会に行きたいって言ったときのエピソードだ。継母が灰かぶりに与えた課題に注目してね。

けれどもママ母はいいました。

「灰かぶり、おまえは、ほこりだらけだし、いい服は一枚も持っていない。それに、ダンスもできないじゃないか。それなのに、舞踏会に行こうというのかい」灰かぶりがそれでもたのみつづけると、ママ母はどうとうこういいました。

「レンズ豆をひとはち、灰の中にぶちまけるから、もし、おまえがそれを二時間以内にぜんぶひろいだせたら、つれてってやろう」

ママ母は、そういつて、レンズ豆を灰の中にぶちまけました。灰かぶりは庭へ出るうら木戸へ行つて、さげびました。

「やさしい鳩さん。きじばとさん。そして、空にいる小鳥さんたち、みんな来て、わたしの豆ひろいを手つだつておくれ」

よい豆は、はちの中へ

わるい豆は、自分のおなかの中へ

すると、台所の窓から、白い鳩が二羽まいこんできました。つづいて、きじばとたちがきて、しまいには、空にいるあらゆる鳥がばたばたとびこんできて、灰のまわりにおりました。そして、鳩たちが、コツコツコツコツと豆をついばみはじめると、ほかの鳥たちも、いせいに、コツコツコツコツとついばみました。そして、いい豆はぜんぶ、まるいはちの中へ入れました。

一時間もたたないうちに鳥たちは、みんな仕事をおえて、また窓からとびだしてきました。灰かぶりは、きつと舞踏会に行かせてもらえろと思つてよろこんで、まるいはちをママ母のところへ持つていきました。けれども、ママ母は、

「だめだよ、灰かぶり。おまえは服を持つてないじゃないか。それにダンスもできない。おまえは、もの笑いになるのがおちだよ」といいました。

灰かぶりが泣くと、ママ母はいいました。

「もし、二はいぶんのレンズ豆を、一時間で灰の中からきれいにひろいだせたら、つれてってやろう」

ママ母は、そんなことはできるはずがないと思つたのです。そして、まるいはち二はいのレンズ豆を、灰の中にぶちまけました。灰かぶりは、庭につづいているうら木戸のところへ行つてさげびました。

「やさしい鳩さん。きじばとさん。そして、空にいる小鳥さんたち、みんな来て、わたしの豆ひろいを手つだつておくれ」

よい豆は、はちの中へ

わるい豆は、自分のおなかの中へ

継母は、灰かぶりが初めの課題を簡単にクリアしたんだから、二回目の課題だつてクリアするに決まつてるって、思わないんだね。一回目と二回目のエピソードが孤立しているんだ。



母親は、三回お月を殺そうとするよ。そして三回ともそのことを事前にお星に打ち明けてるんだね。お星はお月をすくったのに、母親は気がついていないんだ。

母親は、それをみては、

5

（お月もきれいだし、お星もきれいだ。でも、もしお月がいなかったら、お星を、もつともつとかわいがってやれるのに」と、思っていました。そして、ついあるとき、毒まんじゅうをこしらえて、お月に食べさせる気になってしまいました。母親はお星をよんで、

「お星、お星。今夜、姉さんに、毒まんじゅうをこしらえて食べさせるから、おまえ、けっして姉さんのまんじゅうを食べるんじゃないよ」といいました。

お星は、そのことをこっそりお月に知らせました。

「姉さん、姉さん。今夜、母さんがくれるまんじゅうを食べたらだめよ。わたしのをあげるから、わたしのまんじゅうを食べてね」

おかげで、お月はその夜、毒まんじゅうを食べないで済みました。

つぎの朝になると、母親は、お月はもう死んだものと思いましたが、いつものようにいろいろに火を入れて、

「お月、お星、おきておいでー」といいました。すると、

「はあい」と、ふたりそろっておきてきました。母親は、

（あれ、この子は、毒まんじゅう食べさせても死なないのか）と思いましたが、そこでこんどは、天井の梁から、お月を槍でつく気になってしまいました。母親は、またお星をよんで、

「お星、お星。今夜、姉さんの寝床を梁から槍でつくから、姉さんのそばで寝るんじゃないよ」といいました。

お星は、また、こっそりお月に、

「姉さん、姉さん。今夜は姉さんの寝床で寝たらだめよ。わたしの寝床でいっしょに寝てね」といって、お月を自分の寝床に入れ、お月の寝床にはあずきの俵を入れておきました。その夜、母親はそっと梁にあがり、お月の寝床めがけて、槍でぶつー、ぶつーとつきました。

つぎの朝になると、母親は、お月はもう死んだものと思いましたが、いつものようにいろいろに火を入れて、

「お月、お星、おきておいでー」

といいました。すると、「はあい」と、ふたりそろっておきてきました。母親は、

（あれ、あれ、この子は、毒まんじゅう食べさせても、槍でついても死なないのか）と思いました。そこでこんどは、お月を遠くの山にする気になりました。

母親は大工をよんで、お月を入れる箱をこしらえさせ、

「お星、お星。姉さんや山へするのことにしたからね」といいました。



「心臓がからだの中にない巨人」

巨人が帰宅後、エスピンのにおいを嗅ぎつけるところだよ。とってもはらはらする場面だ。

エスペンはベッドの下にもぐりこみました。エスペンがからだの向きを変えるか変えないうちに、もう巨人が帰ってきました。

「ふん、なんだ、この匂いは。うちじゅう人間の血の匂いがするじゃないか」と、巨人は雷のよな声でいいました。お姫さまは、

「ええ、そうでしょうとも。さつき、カササギが人間の骨をくわえてとんできて、煙突から落ちていったんですの。大急ぎでつまみ出してすてたんですけれど、匂いはすぐには消えませぬのね」といいました。

巨人はそれ以上、何もいいませんでした。

.....略.....

巨人が戻ってくる時刻になると、エスペンはまたベッドの下にもぐりこみました。そのとたん、巨人が帰ってきました。

「ふん、なんだ、この匂いは。家じゅう人間の血の匂いがするじゃないか」

「ええ、そうでしょうとも。さつき、カササギが人間の骨をくわえてとんできて、煙突から落ちていったんですの。大急ぎでつまみ出して捨てたんですけれど、まだ匂いが残っているんですわ」

巨人はそれ以上何もいいませんでした。

.....略.....

巨人が帰ってくる時刻になると、エスペンはまたベッドの下にかくれました。そこへ、巨人が帰ってきました。

「ふん、なんだ、この匂いは。うちじゅう人間の血の匂いがするじゃないか」

「ええ、そうでしょうとも。さつきカササギが人間の骨をくわえてとんできて、煙突から落ちていったんですの。大急ぎでつまみ出して捨てたんですけど、やっぱり匂いが残ってしまったんですわ」

巨人はそれ以上何もいいませんでした。

おひめさまは三回とも同じ言葉で答えてるのに、巨人は不審に思わないんだ。三つのエピソードがおたがいに影響を与えあっていないからなんだね。

「いばらひめ」



十三人目の女が呪いをかけた場面と、おひめさまが十五歳になった日の場面、この二つのエピソードが孤立しているんだ。

十一人の女たちが贈り物をさずけたとき、招待されなかった十三人目の女がとつぜん入ってきて、大声でさげびました。

「この子は十五歳になったら、つむを指にさして死ぬであろう」そしてくるりとむきをかえて、出ていってしまいました。

すると、まだ贈り物をしていなかった十二人目の女が歩みできました。この女にもわるい予言をとり消すことはできませんでしたが、それを弱めることはできるので、こういいました。

「けれどもそれは死ぬのではなくて、お姫さまが、ただ百年のねむりにおちることにしましょう」
.....略.....

お姫さまがちょうど十五歳になった日に、王さまとおきさまがお出かけになり、お姫さまがひとり、城にのこりました。

お姫さまはあちこち歩きまわって、城の中を好きなだけ見てまわりました。そしてしまいに、古い塔にやってきました。そこには、せまいらせん階段があつて、それをのぼっていくと、小さなとびらがありました。鍵穴には、さびた鍵がささっています。

この部屋でおひめさまはつむを指にさして眠りに落ちるんだ。王さまたちはなぜおひめさまをひとりにして出かけてしまったんだろう。

それはね、それぞれのエピソードが殻にとじこもっているからだよ。でも殻にとじこもってなかったら、おひめさまは百年の眠りに落ちることもなかっただろうし、王子さまにもめぐり会えなかったんだ。ちっとも面白くない物語だよ。

「金の鳥」



きつねが末の王子に忠告するね。三回忠告する。そのたびに王子は反対のことをしてしまうんだ。失敗に学ばない。三回のエピソードが孤立しているから。でもおかげで、王子は金の鳥だけでなく金の馬と美しい王女も手に入れることができたんだよ。

つぎの朝、きつねがまた道に立っていて、こういった。

「この道をまっすぐ行きなさい。すると、お城があります。そのお城の前で、たくさん兵隊が、みな横になって、いびきをかいてねむっています。でもそれにはかまわず、まっすぐお城の中へ

入っていきなさい。いちばんおくの小さな部屋にある木の鳥かごの中に、黄金の鳥がいます。そばには、ごうかな黄金の鳥かごがぶらさがっています。黄金の鳥を木の鳥かごから、黄金の鳥かごにうつしたりするんじゃないよ。そんなことをしたら、ひどいめにあいますからね」

きつねはしつばをぴんとのぼし、末の王子をそこに乗せ、切りかぶも石もとびこえてつつ走っていった。また、髪の毛が風に鳴った。

城に着いてみると、何もかも、きつねのいったとおりであった。末の王子はいちばんおくの小さな部屋へ入っていった。そこには、黄金の鳥が、木の鳥かごに入っていて、そばに、黄金の鳥かごがあった。そして、床には黄金のりんごが三つ、ころがっていた。

これを見て、末の王子は考えた。（この美しい鳥を、こんなきたらしい鳥かごの中に入れておいたら、どうしたっておかしいな）

末の王子は、木の鳥かごをあけて、黄金の鳥をつかみ、それを黄金の鳥かごの中へ入れた。そのとたん、黄金の鳥がするどく鳴いた。兵隊たちがみな目をさまし、末の王子はつかまえられて、牢屋へぶちこまれた。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

末の王子は、黄金の馬なんて手に入れられるわけがないと思い、すっかりしよげこんで、旅に出た。そしてため息をついていると、またあのきつねが目の前にあらわれていった。

「だからいったじゃないですか。わたしのいうことをきかないから、こんなことになったんですよ。でもわたしのいうとおりにする気があるなら、もう一度忠告してあげましょう。この道をどんどん歩いていきなさい。すると、お城があります。黄金の馬はその城の馬小屋にいるんです。馬小屋の前では馬丁たちがいびきをかいてねむっているでしょう。だから、あなたはやすやすと黄金の馬をひきだすことができます。でも、その馬には、木と革でできたそまつな鞍しかのせちゃいけません。そばにぶらさがっている黄金の鞍をのせちゃだめですよ」きつねはこういってしつばをのぼし、末の王子をそこに乗せ、切りかぶも、石もとびこえてつつ走っていった。また、髪の毛が風に鳴った。

城に着いてみると、何もかもきつねのいったとおりであった。末の王子は、黄金の馬に木と革でできたそまつな鞍をのせようとしたが、（これじゃ、なにもかもだいなしだ。この馬にふさわしい、黄金の鞍をのせてやろう）と思った。ところが、黄金の鞍が黄金の馬にさわったとたん、黄金の馬がはげしくいなないた。馬丁たちが目をさまし、みなかけよってきて、末の王子は、牢屋にぶちこまれてしまった。

・・・・・・・・略・・・・・・・・

末の王子は悲しい気持ちで旅に出た。するとまた、あのきつねが目の前にあらわれていった。「どうして、あなたは、わたしのいうことをきかなかったんです。でも、もう一度忠告してあげましょう。この道をまつすぐ行きなさい。夕方には黄金のお城に着くでしょう。夜中の十二時になると美しい王女が、おふろに入りに来ます。そしたら、そこへ入って行って、その王女にキスをするのです。そうすれば、王女はついてきます。ただ、王女が出かける前に両親にわかれを上げることだけは、許してはいけませんよ」

きつねはしつばをぴんとのぼすと末の王子をそこに乗せ、切りかぶも石もとびこえてつつ走っていった。また、髪の毛が風に鳴った。

城に着いてみると、何もかもきつねのいったとおりであった。そして、夜中に、美しい王女がおふろに入りやってくると、王子はとびだして行ってキスをした。王女は、

「よるこんであなたについていきます。けれども、その前に、両親にわかれをつけることを許してください」と、なみだを流してたのんだ。

はじめは、末の王子はそれをききいれなかった。けれども、王女がますますはげしく泣いて、足もとにひれふしてたのむので、とうとう許してしまった。ところが、王女が父の王さまのところへいくと、王さまは目をさまし、ほかのものもみんな目をさました。末の王子はまたまたつかまえられ、牢屋にぶちこまれてしまった。

「三匹のこぶた」



こぶたが約束の時間より早く出かけていって、おおかみを出しぬくエピソードが三回あるよ。おおかみはぜんぜん気がつかないでだまされるんだ。聞いている子どもたちが大喜びする場面だね。

いくら、フツとふいても、プツとふいても、家が倒れないのがわかると、オオカミはいいました。

「子ブタくん、おれは、いいカブのできる畑、知ってるぞ」

「どこだね？」

子ブタは聞きました。

「うん、お百姓のスミスどんの畑だ。あしたの朝、用意してまっていれば、おれがさそいに来るよ。いっしょに行って、ごちそうのカブを、少しとってこようよ。」

「そうしよう。したくして、待っているよ。何時に行くつもりだね？」と、子ブタは聞きました。

「そうだな。六時にしよう」

さて、つぎの朝、子ブタは、五時に起きて、カブをとってきてしまいました。すると、オオカミが六時にやってきて、いいました。

「子ブタくん、したくはできたかね？」

そこで、子ブタはいいました。

「したくだって？ぼくは、もう、行って帰ってきたんだよ。ごちそうのカブも、なべいっぱいとってきたよ」

これを聞いて、オオカミは、とても腹を立てました。けれども、何とかして、この子ブタを食べてしまおうと思っていたものだから、こういいました。

「子ブタくん、おれは、いいリンゴの木のあるところを知っているぞ」

「どこだね？」

子ブタは聞きました。

「メリ屋敷のくだもの畑よ。もしおまえがおれをだまसानけりや、おれはあしたの朝、五時に迎えにきて、リンゴをとってやるよ」

さて、つぎの朝、子ブタは、オオカミの来るころには、もう家に帰っているようにしようと思つて、四時に起きて、急いでリンゴを取りに行きました。けれども、道は、きのうより遠いし、

リンゴの木にも登らなくちゃなりません。そこで、ちょうど木から下りようとしていると、向こうの方から、オオカミがやってくるのが見えたので、さあ、子ブタは、恐くなつてしまいました。

オオカミは、そばまでやってくるよ、

「やあ、子ブタくん、君は、おれよりさきに来てたんだな？このリンゴは、いいリンゴか」といいました。

「ああ、とてもね。きみにも一つ、ほうつてやるよ」

そう言つて子ブタは、とても遠くの方へリンゴをほうつてやりました。そして、オオカミが、そのリンゴをひろいに行っているあいだに、急いでとびおりて、家まで、かけてけつてしまいました。

次の日、オオカミは、またやつてきて、子ブタにいいました。

「子ブタくん、今日のおひるすぎ、シャンクリンの町に、市がたつんだ。おまえ、行くか？」

「ああ、行つてみよう。きみは、何時ならいいね？」と、子ブタはいいました。

「三時」と、オオカミはいいました。

そこで子ブタは、いつものように、**時間より早く出かけ**、市につくと、バターをつくるおけを買いました。そして、それを持って、家に帰つてこようとすると、むこうの方から、オオカミがやってくるのを見えました。さあ、子ブタは、どうしていいかわかりません。そこで、子ブタは、おけの中にかくれ、中からおけをごろごろがしました。すると、おけは、ぐるぐる、ぐるぐる、まわりながら丘をおりはじめましたので、オオカミは、すっかりおどろいて、市に行かないで、家に逃げて帰つてしまいました。